

2012年1月20日

JANAMEF 研修中間報告書

氏名：早川佳代子

研修先機関名、役職：Fellow, Division of Infectious Disease,

Wayne State University, Detroit Medical Center

研修期間：2009年7月1日より現在

私は2001年に東北大学医学部を卒業、日本国内で内科認定を取得し、内科医として研鑽を積んでまいりました。医学部学生であった頃より、予防・治療により患者さんの予後を大きく左右しうる感染症学に大変興味を持っていました。2005年から2007年までは国内有数の感染症・微生物講座である東邦大学に内地留学しレジオネラ菌感染症に関する研究を施行、2009年に博士号を取得しました。しかし、国内複数の施設での研修・勤務、博士号取得の過程を経てもなお、臨床的な感染症の諸問題に実用的に対処できるようなスキルがなかなか身に着かないことに焦りを感じており、また国境、文化の壁を容易に超えうる感染症疾患特有の問題に適切に対応できるようになるためにも、海外留学の必要性を感じるようになりました。勤務医及び大学院生として勤務、研究する傍らでの留学準備は決して容易なものとはいえませんでした。自分の感染症に対する情熱だけは少なくとも世界に通用すると信じ、全力で取り組んだ結果、第一希望の Wayne State University/Detroit Medical Center に ERAS を通じマッチし、2009年から研修を開始し現在に至っています。

私が Wayne State University を第1希望に選んだのは、見学に来た際ラウンドした指導医、Fellow の臨床スキルが他プログラムに比べ際立っており、また患者層が非常に豊富で2年間で質・量ともに充実した研修が受けられそうな点に加え、academic な研究分野も充実しているという印象によりましたが、2年間の研修を終えた今、その印象は間違っていなかったと確信しています。HIV, HIV 以外の免疫不全者における感染症(固形癌、血液癌、幹細胞移植後)、固形臓器移植後感染症、一般感染症など経験できた疾患は限りなく、また指導医の臨床スキルはまさに“大リーガー医”と呼ぶにふさわしいものです。Fellow はレジデント、医学生からなるチームを統括する役割を与えられ、日々のラウンドに加え、on-duty の間は病院中から感染症の診断・治療にかかわる質問の電話や廊下や病棟でのちょっとした質問がひっきりなしの状態、非常に密度の濃い日々を過ごしました。院内他科の感染症科に対する信頼度は高く、Fellow は毎月の各科からのコンサルト数が100を超えることが日常的な非常にアクティブなプログラムの最前線で機能することを求められます。これに加え、週に1回の HIV・感染症クリニック、症例カンファランスでの発表、STD クリニックや微生物実習、研究期間が加わり、感染症に関してバランス良くオールラウンドのスキルが身に着く

よう、プログラムは非常に工夫されています。臨床所見のプレゼンテーションのみで鑑別診断を Discussion する毎週のグランドラウンドでの白熱した議論は圧巻で、言語や文化の壁による苦勞を鑑みても今日に至るまで1日、1秒たりともアメリカに来たことを後悔したことはありません。事実、研修2年目に受験した全米の感染症 Fellow を対象にした In-training exam では、全米の受験者中最高得点である99点をマークすることができました。この素晴らしい研修が可能になったのもひとえに JANAMEF 財団から頂いた助成金の助けによるところが大きく、大変感謝しています。

当プログラムでの感染症 Fellowship は通常2年間ですが2年目終了時に、1人の Fellow のみ進むことのできる1年間の Infection Control&Hospital Epidemiology fellowship の可能性を提示され、現在は Infection Control&Hospital Epidemiology fellow として研究、病院疫学、院内感染について集中的に学ぶ貴重な機会を頂いています。

近年の世界的な耐性菌の増加、ウイルス性疾患が容易に国内外に拡散する事例からも病院疫学、院内感染の分野の今後間違いなく感染症領域において非常に重要な位置を占めるものと思われ、現在はこの1年間を最大限に生かすべく、日々の研修に取り組んでいます。3年間総じての研修結果については帰国後改めてご報告させて頂きたく思います。